

コロナ禍における体育学習指導の一考察

ーボール運動における教材開発を通してー

茨城県教育研修センター教科教育課 木塚 範昭
常総市立水海道小学校 石川 勇

A Consideration on Physical Education Classes during the Covid-19 Pandemic:
the Development of Teaching Materials for the Ball Exercise

KIZUKA Noriaki
ISHIKAWA Isamu

【要旨】

「新型コロナウイルス感染症に対応した接続的な学校運営のためのガイドライン」及び「今年度の体育における学習活動の取扱いについて」により学校活動においても多くの制約が課せられた。認定NPO法人フローレンスが実施した「一斉休校に関する緊急全国アンケート調査」では、保護者にとって子どもの運動不足が一番の課題であることからコロナ禍における体育教科の期待は大きい。そこで、コロナ禍における体育授業の教材を開発し、児童のにとって安全で楽しい体育授業の在り方について検討した。

キーワード コロナ禍における体育授業、ボール運動の教材開発

1 はじめに

2019年12月、新型コロナウイルスが中国湖北省武漢市において発見され、我が国、日本においても2020年1月に初の新型コロナウイルス感染患者のニュースが飛び込んできた。あれからもう一年が経過しているが終息の兆しがまだ見えていない。昨年2月27日に政府が全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の一斉臨時休校を要請し、長期にわたる休校を余儀なくされ、教育活動に甚大な影響が出た。緊急事態宣言後の3月に認定NPO法人フローレンスが実施した「一斉休校に関する緊急全国アンケート調査」によれば、この休校措置で困っている保護者は68.1%であり、その内訳の内容では「子どもが運動不足になること」が69.9%と次に「友達に会えないことのストレス」が56.8%、「学習に遅れが出ること」が56.6%と学校教育に学びに思いを馳せている。特に約7割の保護者が「子どもへの運動不足」について困っていると感じていることから学校体育の期待が大きいことが分かる。国から新しい行動様式が出され、新型コロナ感染症に直面したことで、私たちは今、これまでに経験したことのない体育のあり方を探り、そして実践することになった。「3密」を避け「ソーシャルディスタンス」を確保するために、体育の授業では、今、多くの制約を受けている。そこでコロナ禍における体育の在り方について検

討していきたい。

2 新型コロナウイルス感染症対策における体育授業の方針

文部科学省より令和2年6月5日「新型コロナウイルス感染症対に対応した接続的な学校運営のためのガイドライン」が出され、学校運営の方針が示された。12月5日現在において、5回の見直しが行われている。ガイドラインの第3章では、「各教科における具体的な活動場面ごとの感染症予防対策について」があげられ、体育においては、資料1となる。

資料1 新型コロナウイルス感染症対に対応した接続的な学校運営のためのガイドライン

- ・ できるだけ個人の教材教具を使用し、児童生徒同士の貸し借りはしないこと。
- ・ 器具や用具を共用で使用する場合には、使用前後の手洗いを行わせること。
- ・ 体育授業に関し、医療的ケア児及び基礎疾患児の場合や、保護者からの感染の不安により授業への参加を控えたい旨の相談があった場合等は、授業への参加を強制せずに、児童生徒や保護者の意向を尊重すること。また、体育の授業は、感染者が発生していない学校であっても、児童生徒や教職員の生活圏におけるまん延状況を踏まえて、授業の中止を判断すること。
- ・ 体育の授業は、当面の間、地域の感染状況にもよるが、可能な限り屋外で実施すること。ただし気温が高い日などは、熱中症に注意すること。体育館など屋内で実施する必要がある場合には、特に呼気が激しくなるような運動は避けること。
- ・ 体育の授業におけるマスクの着用については必要ありませんが、体育の授業における感染リスクを避けるためには、児童生徒の間隔を十分確保するなど（「学校の体育の授業におけるマスク着用の必要性について」）を踏まえた取扱いとしてください。
- ・ 水泳については、（「今年度における学校の水泳授業の取扱いについて」）を参照して下さい。

また、令和2年10月7日にスポーツ庁より資料2「今年度の体育における学習活動の取扱いについて」が通知された。その中では、多様な学習活動を実施するため、感染拡大が見られない地域においては、以下に示す学習活動例を踏まえて授業を実施することや活動人数や活動時間を増減することを考えながら取り組むことがあげられた。

資料2 今年度の体育における学習活動の取扱いについて

小学校 ボール運動系 ゴール型 / 中学校・高等学校 球技 ゴール型（例）

- 近接する場面が発生する学習活動については、活動時間の1/3程度とする。
- ゲームなどを実施する場合は、近接する場面の頻度が多くならないよう、移動できるエリアを制限するなどの工夫をすることも考えられる。
- 活動中は不必要に大声を出さないように指導する。

小学校

学習指導要領及び解説に示されている内容〔技能〕		人数	時間	留意点
第5学年及び第6学年				
ボール操作	投げる	特定の少人数 (3名程度)	特段の制限なし	・相手との身体的距離を確保する。
	受ける			
	蹴る			
	止める			
	運ぶ			
	手渡す			
ボールを持たないときの動き	ボール保持者からボールを受けることのできる場所に動く			・近接する場面の頻度が多くならないように工夫する。 ・移動できるエリアを制限してボールを取り合うなどの工夫が考えられる。
簡易化されたゲーム	攻守入り交じった簡易化されたゲーム	・特定の少人数(3名程度) ・特定のチーム同士で実施する。	・近接を伴う活動は、活動時間の一定の割合(1／3程度)とする。	・近接する場面の頻度が多くならないように工夫する。
	陣地を取り合う簡易化されたゲーム			

中学校・高等学校

学習指導要領及び解説に示されている内容〔技能〕		人数	時間	留意点
ボール操作	シュート	特定の少人数 (3～5名程度)	特段の制限なし	・相手との身体的距離を確保する。
	パス			
	ボールキープ			
空間に走り込むなどの動き	ゴール前の空いている場所に走り込む動き		・近接を伴う活動は、活動時間の一定の割合(1/3程度)とする。	・近接する場面の頻度が多くならないように工夫する。 ・移動できるエリアを制限してボールを取り合うなどの工夫が考えられる。
	ボールを持っている相手をマークする動き			
空間を作りだすなどの動き	味方から離れる動きや人のいない場所に移動する動き			
	相手の動きに対して、相手をマークして守る動きと所定の空間をカバーして守る動き			
空間を埋めるなどの動き	相手の守備を見ながら自陣から相手ゴール前の空間にバランスよく侵入する動き			
	空間を作り出す攻撃をさせないように、突破してきた攻撃者をカバーして守ったり、相手や味方の位置を確認して、ポジションを修正して守ったりする動き			
攻防	ゲーム	・特定の少人数(3～5名程度) ・特定のチーム同士で実施する。		・近接する場面の頻度が多くならないよう工夫する。

この取扱いでは、ボール操作及びボールを持たない動きを身に付けるための留意点として、近接する場面の頻度が多くならないように工夫すること、図1のような移動できるエリアを制限してボールを取り合うなどの工夫などがあげられている。また、簡易化されたゲームにおいては、近接する場面の頻度が多くならないように工夫することがあげられている。これらの条件を踏まえた教材を検討していく。

【3ライン横グリッド型のゲーム】 【3ライン縦グリッド型のゲーム】

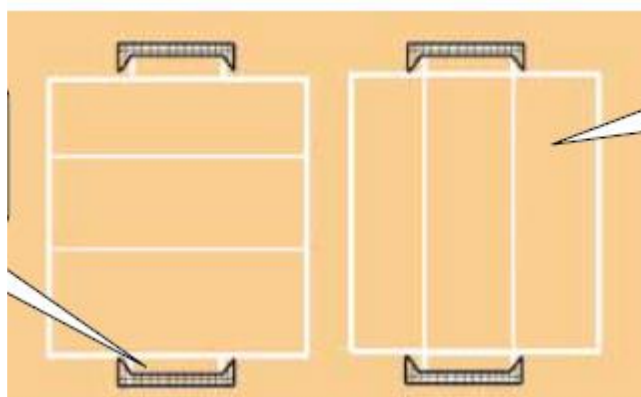


図1 移動できるエリアを制限したゲーム

3 ボール運動における教材開発

(1) 体育における教材・教具について

高橋(1994)は、「よい体育授業を実現させるための条件は、『基礎的条件』と『内容的条件』の二重の構造によって成り立っている」と述べている。「内容的条件には、どのような教材や教具が工夫され提供されていることが大切である」と述べている。また、岩田(1994)は「授業の成果は、意味ある学習課題への子どもたちの積極的な取り組みによって生み出されることは間違いない。その一つの大きな前提になるのが、教師による教材・教具づくりである。よい授業は、教材・教具づくりからといっても過言ではない」と述べている。さらにボール運動では、単元を通して取り組む、いわゆる「メインゲーム」が単元の教材づくりの対象として位置付き、ボール操作が難しく、ゲーム状況において求められる判断が複雑であれば、学習者はその本質的な面白さを味わえない。そこでは、学習者の体格や能力に適したコートや用具を工夫しながら、求められる運動技能を緩和していく視点が重要だと述べている。これらのことから子どもたちにとって、わかりやすく、技能が身に付きやすく、楽しいと思えるような教材・教具が大切であると考ええる。

(2) 運動の構造について

ボール運動領域には、ゴール型（バスケットボール、ハンドボール、サッカー）、ネット型（バレーボール、卓球、テニス、バドミントン）、ベースボール型（ソフトボール、野球、ティーボール）ターゲット型（ボウリング、ゴルフ、カーリング）などがあげられる。ゴール型の特徴としては、仲間や相手と接触する場面が多いことがあげられる。一つのボールを奪い合ったり、一つのゴールを守ったりする運動の構造がその大きな要因だと考えられる。子どもたちは夢中になると、ボールや相手に集まってしまう、ソーシャルディスタンスのことを忘れてしまう。教師が「離れなさい」と言っても、運動の構造がそういう動きを引き出してしまう。そこで、「相手から離れる」「相手との距離をとる」ことを運動の構造に組み込むことで、相手との距離を保ちながらゲームができるのではないかと考える。

(3) 開発した教材について

「相手から離れる」「相手との距離をとる」などの運動の構造を活用し、的当て（ターゲット型）の要素を取り入れれば自ずと距離を保ちながらゲームを楽しめるのではないかと考えた。そこで相手からの送球に対して当てられないように、距離を保ちながら得点を競い合うことで楽しめる教材として「ドッジターゲットボール」を開発した。このゲームは、児童に馴染みのある「ドッジボール」を基にネット型、ターゲット型の要素を取り入れ、修正したものである。

図2(p5)は開発した教材である。近接する場面の頻度が多くならないように移動できるエリアを制限し、内野、外野、サポーターの各エリア内の人数は2名とした。コートの広さは内側のラインが縦6m、横8m、外野エリアの幅は2mとし、近接する場面の頻度が多くならないように工夫した。また、メインゲーム前半で

は、内野エリアに丸形のゴムマーカーを「くの字」に置き、同じチームの外野や

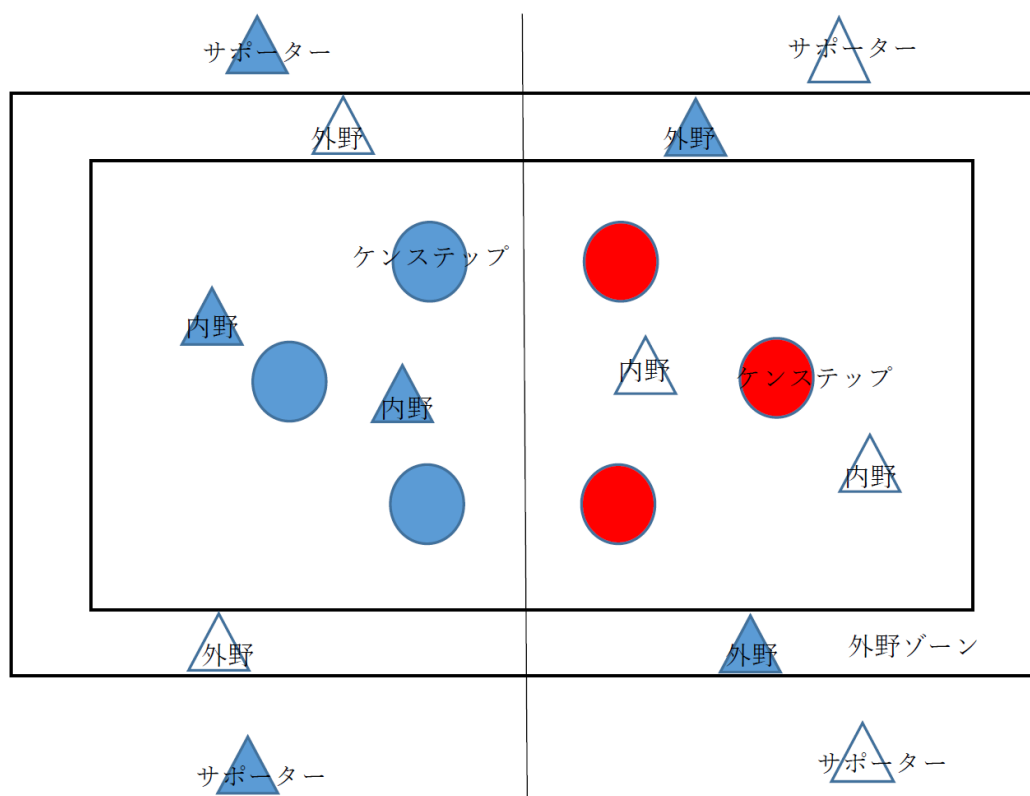


図2 教材開発した「ドッジターゲットボール」

サポーターからの送球は丸形のゴムマーカー上で捕球するルールとし、ターゲット型の要素を取り入れた。このルールによって、外野やサポーターは内野に対して正確に送球する技能や内野は外野やサポーターからの送球を捕球する技能が求められる。メインゲーム後半では、自己のチームの特徴に応じた作戦を選べるように内野エリアの丸形のゴムマーカーを置く場所はチームで決められるようにする。

表3はドッジターゲットボールのルールである。使用したボールであるがボールへの恐怖心をなくすために、当てられても痛くないソフトバレーボール（ゴム製）を使用した。

表3 ドッジターゲットボールのルール

- ・同じチームからのボールは丸形のゴムマーカー上（片足が入っていればよい）で捕球しなければならない。捕球できないときは相手チームのボールとなる
- ・相手チームの内野に当てれば1点
- ・当てられても外野に出ることはない
- ・相手チームからのボールをキャッチできれば1点
- ・外野は外野ゾーンのみしか移動することはできない
- ・サポーターは、自陣の内野へボールを入れることができる
- ・コートは縦6m、横8m、外野ゾーン幅1.5m
- ・サポーター→外野→内野の順で役割を2分ずつ交代する

4 授業の実際について

(1) 単元の指導計画

時		1	2	3	4	5	6	7	8
学 習 の 流 れ	0	オリエンテーション							
		・ドッジターゲットボールについて	○健康観察 ○本時のねらいと内容の確認 ○準備運動 ○ドッジボールマスター対面型，振り向き型						
	10	・学習の進め方の確認	ボールを投げたり，捕ったりして，ゲームを楽しもう。			自分たちの特徴にあった作戦を選んで，ゲームを楽しもう。			海小カップ 2020
	20	・チーム編成 役割分担	○タスクゲーム (的を当てろ3対2)			○タスクゲーム (的を当てろ2対2)			
			○作戦タイム			○作戦タイム			
	30	・試しの運動	○メインゲーム (ドッジターゲットボール1)			○メインゲーム (ドッジターゲットボール2)			
	40								
	45	○整理運動 ○学習のまとめと本時の振り返り ○次時の確認 ○健康観察							

(2) ドリルゲームとタスクゲームについて

高橋（1994）は「ドリルゲームとは、ボール操作の技術や動き方に関わる練習内容をゲーム化したものである。漠然と繰り返される個々の技能の反復練習を明確な行動目標を設定し、ゲーム化を図り、児童生徒の意欲を喚起させることが大切である」と述べている。また、「タスクゲームとは、メインゲームにおける技術や戦術能力を高めるために、特定の課題が焦点化されるように修正されたゲームである」と述べている。そこで、本実践では、児童生徒の投球技能及び捕球技能を高める教材として図2～4のようなドリルゲーム及びタスクゲームを開発した。

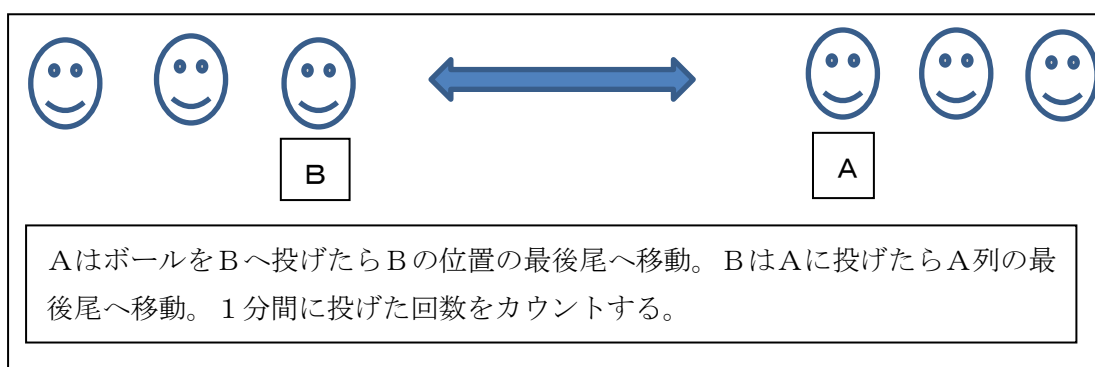


図2 ドリルゲーム「ドッジボールマスター1」

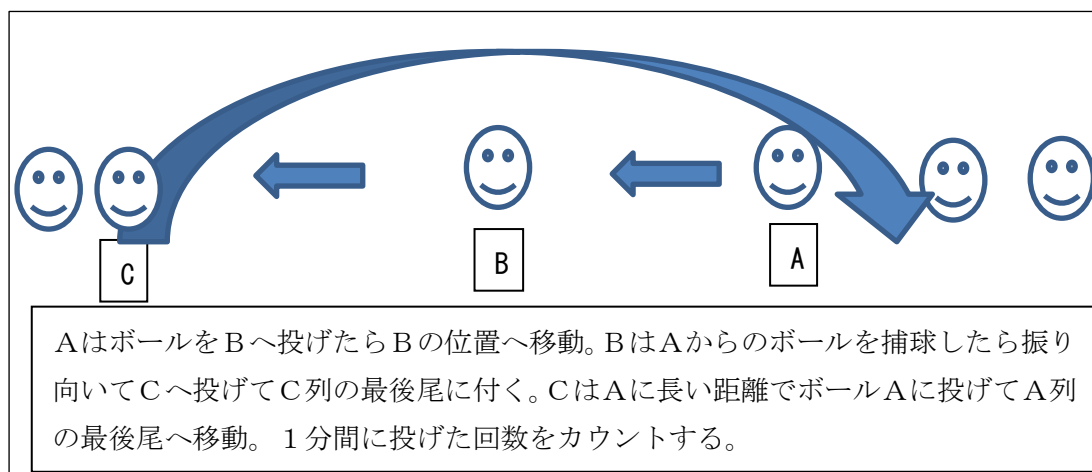


図3 ドリルゲーム「ドッジボールマスター2」

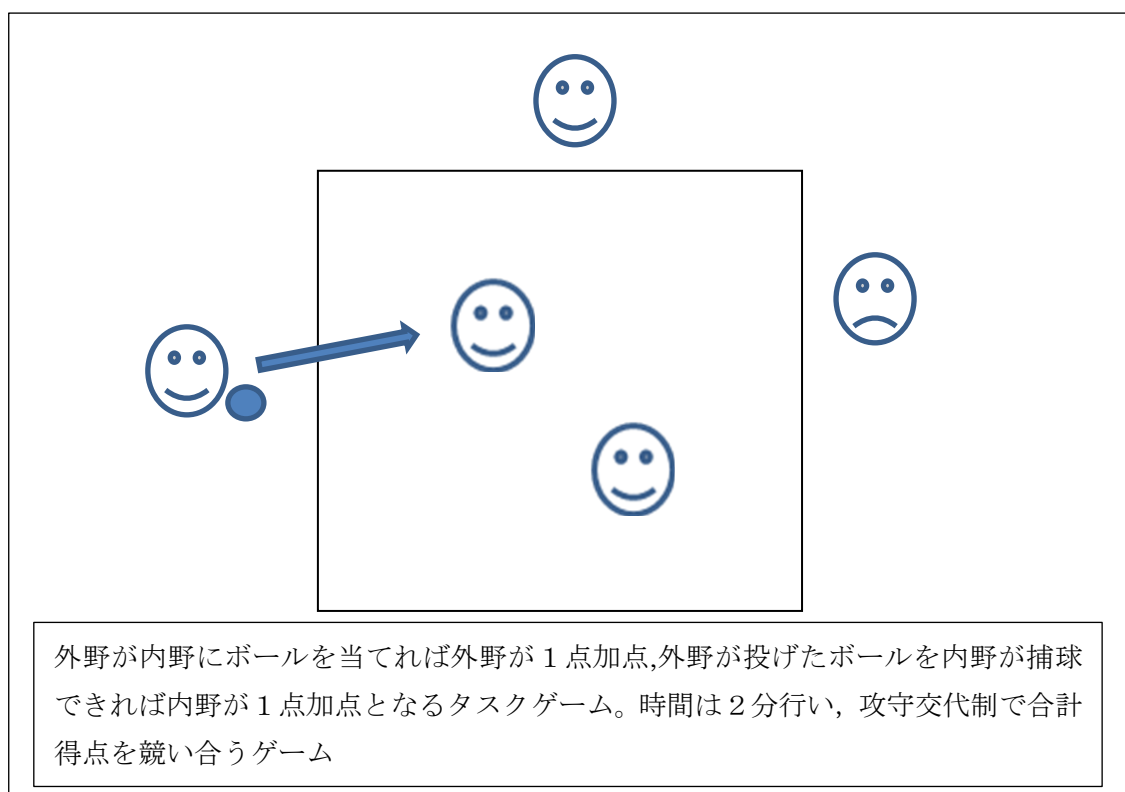


図4 タスクゲーム「的を当てろ3対2」

(3) 目標回数を掲げた工夫について

ドリルゲームでは,学級全体での目標回数を設定し,みんなで1つの目標に向かう一体感や喜びを味わえるようにする。そこで学級全体の目標回数を634回に設定する。学級の合計回数の設定は,スカイツリーの高さである634mから想起し,スカイツリーに見立てた図に634個のマス目をつける。その日のドリルゲームの学級全体の合計回数を塗りつぶし,授業を重ねていくなかで設定した学級の目標回数を達成できるように取り組んでいく。

5 授業実践の分析と考察について

(1) 授業全体の変容

図5 (p9)は,高橋健夫らが作成した形成的授業評価の推移である。これは,成果,意欲・関心,学び方,協力の4観点からなり,授業成果の傾向を確認することができる。意欲・関心の観点において単元が進むにつれて高くなり,単元終わりの8時間目に最高値を記録していることから,開発した教材は児童にとって単元を通して興味をもって楽しく,精一杯取り組むことができたことが考えられる。また,協力の観点においても高い数値であった。内野,外野,サポーターのエリアを全員が経験することにより,そのエリアでの役割を理解し,お互いに教え合いながら取り組めることができからであると考えられる。児童の感想では「上手く投げるコツをグループの人に教えることができた」「ボールを当てられないようにするために

は投げる相手に背中を向けないことを仲間から教えてもらった」などの記述が見られた。さらに技能の習熟をみる成果の観点が5時間目で低くなっている。この要因

は、ドリルゲームの難易度が高くなったことにより、回数が伸びなくなったことやメインゲームにおいて、ターゲットとなるマーカーを置く位置を自分たちで決めたことにより、ゲームの様相が変わったことが要因であると考えられる。しかし、その後、コツや動きを

理解したことで数値が上昇したことから、児童にとって適切な教材であったことが考えられる。

(2) ドリルゲームの投球回数の変容

ドリルゲームでは、児童生徒の投球技能及び捕球技能を高めるため「ドッジボールマスターpart 1」と「ドッジボールマスターpart 2」を実施した。表4は「ドッジボールマスター

part 2」の各グループの合計回数の変容である。5時間目から7時間目において、25回の上昇がみられた。この結果から、投球技能及び捕球技能を高まったことがわかる。授業を重ねるにつれ、長い距離を投げる時には、数歩ステップを踏んでから最後の一步を踏み込んで投げたり、短い距離を投げる時には、体を半身の状態にして捕球することで素早く投球動作に移したりするなど、体全体やステップを使った投球動作が身に付いた児童が多くみられた。さらに投球する距離によって投射角度を変えて投げる様子から

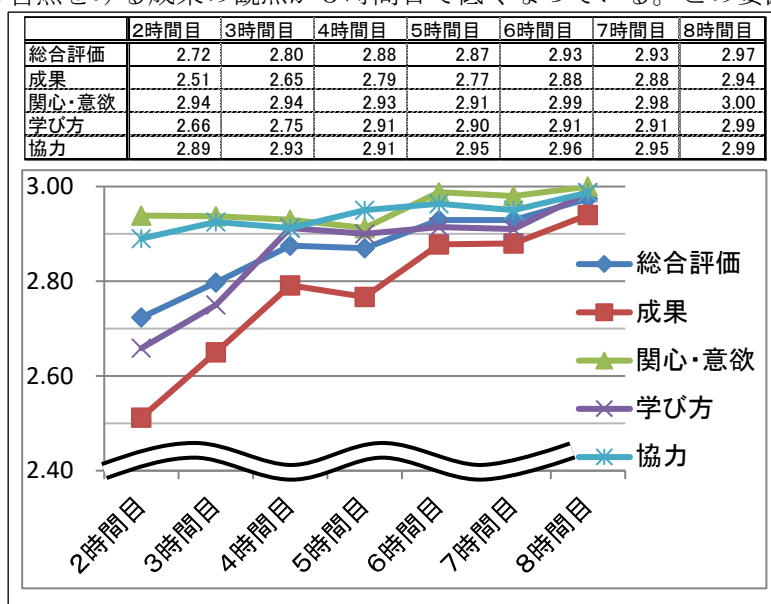


図5 実践における形成的授業評価の推移

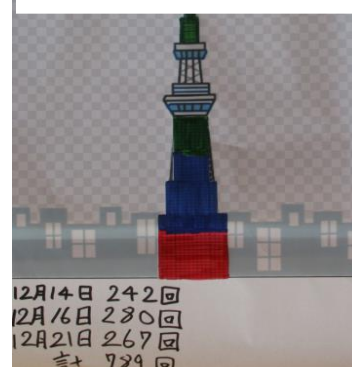
(令和2年12.7～12.20 Z市立M小学校第6学年1組43人)

表4 ドッジボールマスターpart 2の記録の変容

(令和2年12.15～12.22 Z市立M小学校第6学年1組43人)

5時間目	7時間目
242回	267回

資料3 目標回数を到達した図



投能力の技能や知識が身に付いてことが考えられる。また、学級全体の目標回数を634回に設定し、合計回数の達成に向けた取り組みにより学級が一体となり、それぞれのグループが記録更新に向けて取り組む姿が見られた。グループ内においても回数を伸ばすためにボールの投げ方について教え合う姿が多く見られた。目標回数に到達すると、学級が大いに盛り上がり、みんな満足そうに喜んでいた。

(3) ソフトボール投げの距離の変容

今年度はコロナ禍により、体力テストは実施されなかった。そのため、ソフトボール投げの種目を授業前後に行った。表5がその結果である。授業後には学級平均の記録が1.3m向上した。児童の投球動作の観察から、肘やボールを持つ手が肩よりも高い位置で投げることができたり、腕を力強く振りながら投げたり、ステップを踏んでから最後の一步を踏み込んで投げたりするなど、本研究で身に付けた技能を発揮しながらソフトボール投げを計測する児童が多く見られた。また、計測中に「助走をつけて投げたほうが飛ぶよ」や「体を半身にして回転させて投げたほうがいいよ」などのアドバイスがあり、投球動作について理解している児童が見られた。

表5 ソフトボール投げの学級平均距離の変容
(事前：令和2.12.1実施
事後：令和3.1.12実施
Z市立M小学校第6学年1組43人)

授業前	授業後
19.8m	21.1m

6 研究のまとめ

教育現場は新型コロナウイルスによって、これまでの常識を覆されてしまった。体育は、子ども達が密集し、関わりがあつてこそ成り立つ教科である。しかし、その固定観念を今は脱却しなければならない。今までの「当たり前」が通用しないときだからこそ、新たな学校体育を構築していくべき契機だと捉え、子どもたちの学びを保証するためにもコロナ禍における授業づくりを模索していくべきであろう。

岩田(2006)は、「教材には、学習者に習得させたい認識的・技術的、そして社会的行動の学習内容が明確に盛り込まれている必要がある。」と述べている。今回の実践は、子ども達から意欲・関心の観点では高い評価が得られた。しかし、思考力・判断力・表現力に関連する認識的な点では、改善を図る必要がある。令和3年度4月より中学校学習指導要領全面実施となる。コロナ禍での実施は、学校現場においては困難が予想される。しかし、子ども達の学びを止めないためにも私たち教員は、多角的な視点から学校体育をどのように構築していくか検討し、挑戦していかななくてはならない。子ども達が「運動って楽しい」「スポーツが好き」と実感できるような体育授業の在り方を追い求めていきたい。

〈引用文献〉

- 高橋健夫 体育の授業を創る 1994 年 5 月 大修館書店
- 高橋健夫 体育授業を評価観察するー授業改善のためのオーセンティック・アセスメント 2003 年 9 月 明和出版
- 高橋健夫他 新版 体育科教育学入門 2010 年 4 月 大修館書店
- 文部科学省 学校体育実技指導資料第 8 集「ゲーム及びボール運動」 2010 年 9 月
- 大修館書店 体育科教育 2020 年 8 月, 9 月, 11 月
- 文部科学省 「新型コロナウイルス感染症対に対応した接続的な学校運営のためのガイドライン」 令和 2 年 6 月
- スポーツ庁 「今年度の体育における学習活動の取扱いについて」 令和 2 年 10 月